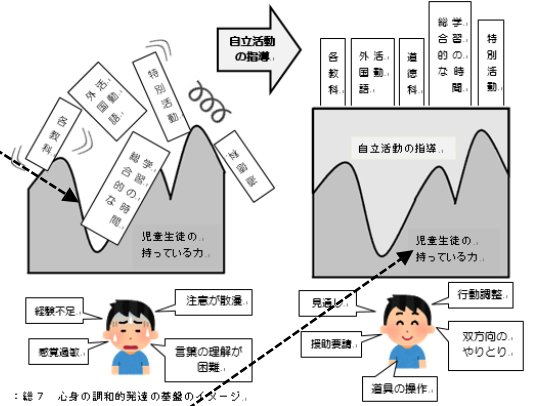


Topic1 特別支援学校に通う児童生徒の各教科等の指導 etc.の目標達成のしづらさ

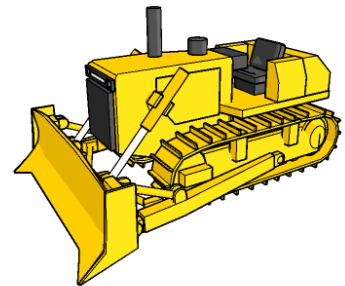
知的障害特別支援学校に通う子どもたちは、知的障害に起因する生活上・学習上の困難があり「発達の土台」がガタガタしています。なので、授業の目標をその指導形態の取り組みだけでは達成できなかったり、時には授業への参加が難しかったり、活動状況が著しく悪くなってしまったりします。「準ずる教育」のみでは、目標の不達成や参加不全、活動不全が連発されちゃう!ピンチ!!どうしよう…。(参照:裏面の教育課程の位置づけ)



Topic2 自立活動は「発達の土台」の基礎工事

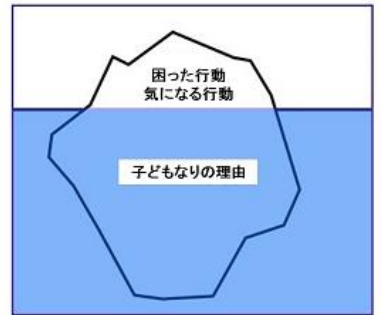
砂の上には城は建たないのと同じく、各教科等の指導や日常生活の指導等においても、必要な「土台」に当たる部分が生活上・学習上の困難によってガタガタになってしまっている場合には、参加や活動が上手くできません。そこで「土台」をつくる基礎工事として『自立活動』が必要になってくるのです。砂の地盤に杭を打って、コンクリートを流し込んで、城が建つようにしていく。そんな作業と同じです。

自立活動は『基礎工事』



Topics3 生活上・学習上の困難の「背景」を捉える

自立活動の課題の抜き出す際には、本人の生活上・学習上の困難の表面のみを捉えるのではなく、その背景を捉えることが大切です。良く用いられるのは氷山モデルですが、例えば、**例 授業中に離席がある**として…

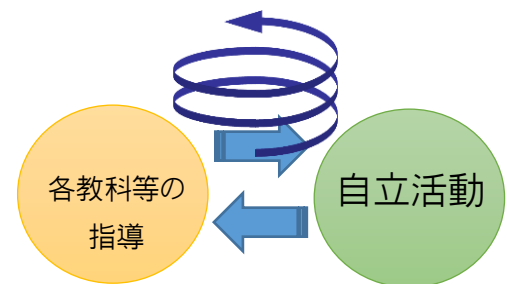


- 背景1 気になるものがあるので確かめに行きたい。
- 背景2 姿勢がつかなくて、座り続けるのが困難。
- 背景3 教室内のエアコンの音が苦手で、出ていきたい。
- 背景4 授業の内容がよくわからず、好きなものがある場所に行きたい。

なぜそのような状況が生じているのか背景を捉えて、具体的な指導内容や配慮、手立てを個に応じた設定をすることができるようになることが、自立活動の課題の抜き出しのポイントです(実例は P3,4 参照)。

Topic4 各教科等の指導と自立活動とを往来しながら目標を実現していく場合

自立活動の主題の選定は、上記のように生活全般から行う場合もあれば、体育や音楽、図工などの各教科の指導の中から「土台がしっかりしていない」と感じるときに、自立活動に戻していく場合もあります。その場合は①各教科等の指導での課題の抜き出し②自立活動で土台を作り各教科等の指導に戻していく…という往来を繰り返しながら子どもたちの力を伸ばしていくことができます。戻し先の指導形態に成果が出ていないなら見直しが必要。例えば、体育の①鉄棒での握り方に課題がある②自立活動で『主題:「回外」「回内」の動きの獲得』に取り組む、とか。。



自立活動の教育課程上の位置付け

自立活動の指導は、特別支援学校の教育課程に特別に設けられた指導領域である。

☆特別支援教育の目的（学校教育法 第八章より）

第七十二条 特別支援学校は、視覚障害者、聴覚障害者、知的障害者、肢体不自由者又は病弱者(身体虚弱者を含む。以下に同じ。)に対して、幼稚園、小学校、中学校又は高等学校に準ずる教育を施すとともに、障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授けることを目的とする。

☆自立活動の目標（特別支援学校小学部、中学部、高等部学習指導要領より）

個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う。

準ずる教育

各教科、道徳、外国語活動及び特別活動の指導に該当する（小学部の場合）

障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授ける

自立活動の指導を中心として行われる

障害のある児童生徒は、障害によって様々なつまづきや困難が生じることがある。小中学校等の児童生徒と同じように心身の発達段階等を考慮して教育するだけでは不十分な面がある。そこで、個々の障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するための指導が必要になる。

（学習指導要領解説自立活動編 P21～22）

自立活動の指導

- ・個別指導の形態で行われることが多い
- ・指導目標を達成する上で効果的である場合は集団指導の形態も考えられる

いずれも、個々の児童生徒の実態把握に基づき、個別の指導計画を作成することが基本

- ・「自立活動の時間における指導」と「学校の教育課程全体を通じて行う指導（下支えの指導）」の2つがある

各教科等の指導においても、自立活動の指導と密接な関連を図って行うことが大切

【自立活動の内容】

「人間として基本的な行動を遂行するために必要な要素」、「障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するために必要な要素」の27項目を「健康の保持」、「心理的な安定」、「人間関係の形成」、「環境の把握」、「身体の動き」、

個々の児童生徒に指導する具体的な指導内容は、6区分27項目の中から必要とする項目を選定し、それらを相互に関連付けて設定することが重要

自立活動の課題決定までの事例

☆ 事例 A

I 実態把握の流れ（流れ図）

学校・学部・学年	小学部・第2学年
障害の種類・程度や状態等	知的障害のある自閉症。言語による簡単な指示理解はできるが、気持ちを伝えることに困難が見られる。順番を待つ等、集団での活動に苦手さがある。
事例の概要	コミュニケーション能力の向上と、他者との基礎的な関わり方の獲得を目指した指導。

① 障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所やよさ、課題等について 情報収集

- ・一部支援が必要なものもあるが、基本的な生活習慣はほぼ自立している。
- ・言語による簡単な指示理解はできるが、写真や図など視覚的な支援があると、より情報を理解しやすい。
- ・初めての場所や騒がしい場所が苦手で、その場から離れてしまう。
- ・水遊びや体を動かすことが好きで、何時間も一人で遊んでいることが多い。
- ・人と関わることは好きだが、まだ一方的な関わりになってしまう。
- ・発音が不明瞭なこともあり、身振りなどでコミュニケーションをとろうとするが、うまく伝わらないことが多い。
- ・気持ちが落ち着かない時には、大きな声を出したり、自らを傷つけたりして不快感を表すことがある。

②-1 収集した情報(①)を自立活動の区分に即して整理する段階

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> ・偏食がある。食事はスプーンやフォークで食べることができる。 ・排尿は自立しているが、排便はふき取りなど一部支援が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思い通りにならないと、大声を出し、人を叩いたりする。 ・初めての場所には抵抗があり、落ち着きがなくなることがある。 ・天候の変化に弱く、雨になると不安定になることがある。 ・好きな活動をやめる時など、気持ちの切り替えが難しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と追いかけておくことがある。(やや一方的) ・順番を待つことが苦手。 ・教員がそばにいて、活動内容を視覚的に伝えたり、手をつないだりするなど、周りの支援があれば、集団の中に入れる時がある。 ・親しい友達や教員となら、手をつなぐことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・危険認知が低く、自動車等に注意することが難しい。 ・自分の名前などいくつかの平仮名は分かっている。 ・身近な具体物と絵のマッチングはできるが、文字とのマッチングはまだ難しい。 ・1～5までの数字と具体物の数のマッチングはできる。 ・なぞり書きの練習をしている。 ・シール貼りは得意である。 ・やることが分かる 	<ul style="list-style-type: none"> ・衣服の着脱はほぼ一人でできるが、ボタンやチャックなどの一部で支援が必要。 ・簡単な身体模倣ができる。 ・体操や走ることなど、身体を動かすことが好きである。 ・虫が大好きで休み時間中に限らず虫を探している。 ・椅子に座っている時、立っている時等、離席しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単な指示に応じて、動くことができる。 ・発音は不明瞭ではあるが「しえんせい」「やだ」などいくつかの言葉を言うことができる。 ・要求を伝えるため、身体を使って表現しようとするが、うまく伝わらず、手が先に出てしまう、八つ当たりをしてしまうことがある。

			と、集中して課題に取り組める。 ・意にそぐわない予定変更があると、「じゃんねんだー」と不安定になる。	
--	--	--	---	--

②-2 収集した情報(①)を学习上又は生活上の困難、これまでの学習の習得状況の視点から整理する段階

- ・自分の思いと違う結果になると、イライラして八つ当たりをしてしまうことがある。(コ)
- ・好きなことを途中で止められたり、自分のペースでできなかつたりすると、怒ってしまう。(心)
- ・いつもと違うことが起こると、不安になって泣いてしまう。(心)
- ・一方的ではあるが、他者への関わりを求めることがある。(人)
- ・指さしなど身体を使って、要求を伝えようとする。(コ)
- ・見通しをもてると、活動になりやすい。(環)
- ・ねんどなど自分の好きな遊びや集中できる課題がある。(心、身)
- ・言葉だけでなく、視覚的にも提示することで、指示が通りやすくなる。(環)

※各項目の末尾の()は、②-1における自立活動の区分を示している。

②-3 収集した情報(①)を〇〇年後の姿の観点から整理する段階

- ・簡潔な単語や視覚支援カード等を使って自分の気持ちを相手に伝えられるようになる。(心、人、コ)
- ・集団活動の基本的なルールを理解し、他者に合わせる等、人との関わりを広げられるようになる。(人、環)

③ ①をもとに②-1、②-2、②-3で整理した情報から課題を抽出する段階

- ・困った時など、他者への上手な気持ちの伝え方を獲得しておらず、他害や大声などで表現してしまう。(心、人、環)
- ・見通しがもてないと、不安になってしまう。(心、環)
- ・他者に合わせるのが苦手で、自分のペースで活動しようとする。(人、環)

④ ③で整理した課題同士がどのように関連しているかを整理し、中心的な課題を導き出す段階

- ・獲得している言葉が少なく、伝え方が身に付いていないことや発音が不明瞭なため、自分の気持ちや思いがうまく伝わらず、怒ったり泣いたりしてしまう。そのため、言葉だけでなく、絵カード等を活用しながら、適切なコミュニケーションのとり方を学習していく。
- ・見通しがもてないような不慣れな活動場面や、苦手な刺激等により不安になることがあるため、環境調整を行い、本児の力を十分に発揮できるようにしていく。
- ・「待つ」「合わせる」などの経験が少ないことや、見通しのもちづらさから、一方的な関わりが多く、相手に合わせたり、順番を待ったりすることが苦手である。そのため、本児の興味・関心のあるものを通し、簡単なルールを理解するような活動を取り入れることで、他者との基礎的な関わり方を学習していく。

課題同士の関係を整理する中で今指導すべき指導目標として

⑤ ④に基づき設定した指導目標を示す段階

- ①平仮名表記の視覚補助カード等を使用しながら順番を待つ等の集団活動での基本的なルールを理解し、他者のペースに合わせて活動できることを増やす。
- ②口語のみでの伝達が難しい際には、補助的にイラストカード選択ができるようになる。